

第1回熱帯シンポジウム「熱帯の器を考える」の報告

1995年11月18日沖縄県琉球大学大会館3階ホールにおいて「熱帯の器を考える」というテーマでシンポジウムを開催した。これは、「熱帯・亜熱帯を考える会」の主催、日本気象学会沖縄支部、沖縄タイムス社、琉球新報社の後援で行われた。琉球大学学生、一般社会人、合計約40名の出席者があった。本シンポジウムはスタートしたばかりの「熱帯・亜熱帯を考える会」主催によるものなので、当会の発足経緯についても併せて報告する。

1. シンポジウム「熱帯の器を考える」の内容

本シンポジウムの目的は熱帯の大気、海水、大陸・海底の実態およびそれらの相互の係わりあいを取り上げ、地球の上の熱帯の働きを理解すること。熱帯の“器”，すなわち、ポテンシャルを気候地理学、気象学、海洋学、地学的立場から理解することである。

下記の講師の方々から、それぞれ40分程度の基調講演をいただき、その後30分程度フロアの方々との質疑討議の時間をもった。

- ・熱帯の気候 松本淳(東京大学大学院理学研究科)
- ・熱帯の海洋 花輪公雄(東北大学大学院理学研究科)
- ・熱帯の海底 木村政昭(琉球大学理学部)
- ・熱帯の上層大気 丸山健人(気象研究所予報研究部)

松本淳氏は熱帯の気候学的な定義に始まり、熱帯大気の大規模な流れ方、熱帯の季節概念、その対比でみる沖縄の気候について講演した。花輪公雄氏は海洋循環の全体像についてわかりやすく解説した後、大気へのエネルギー源としての北太平洋熱帯海域の位置付け、エルニーニョ/南方振動、近年わかりつつある数10年スケールの循環等について講演した。木村政昭氏は海洋や気象の軟らかい循環と変わった地球のハードな面での研究成果について話した。東太平洋海膨と並んで沖縄トラフを含めた西太平洋リフト系の存在についてふれ、全体で4つの割れ目が地球を覆っている等、説明した。丸山健人氏は、下層から成層圏にわたる気温の緯度変化を概観し、この気温の緯度方向変化とからめて、上層風の実態が理解できることについて話した。また、1984～1995年間的那覇とシンガポールにつ

いて上空成層圏までの風の解析結果を比較提示し、熱帯の上層風のユニークさ(QBO性)、ピナツボ噴火の影響などについても話した。

2. 「熱帯・亜熱帯を考える会」の発足

地球環境問題のすべてが直接間接大気の挙動にからんでいる。そういう意味で、地球環境問題の解決には当然、気象研究者が大いに関与推進すべきものである。こういう考えから、大気に関心のある琉球大学教官と日本気象学会沖縄支部会員の有志が集まり、この会を発足させた。円滑柔軟な企画運営をはかるために、会は日本気象学会沖縄支部の一部ではなく、独立の任意団体とした。全国各地で地球環境問題が取り組まれるようになってきているが、ややもすると、この問題に対する沖縄地区の人々の関心度は低い。しかし、いずれ地球環境問題は沖縄でも重要視されて来る。そのことを念頭におきながら、「沖縄では、まず、熱帯・亜熱帯を考えよう」というキャッチフレーズで「熱帯・亜熱帯を考える会」という名称にした。会の役員は石島英(会代表 琉大教養部)、下地朝勇(沖縄気象台予報課)、中村功(琉大教養部)、諸喜田充(琉大理学部)、根間俊行(幹事 沖縄気象台予報課)、上江洲司(会計 那覇航空測候所)。ところで、昨年10月集中講義で琉球大学にこられた前気象庁長官の新田尚氏が講師をされた「国際化とグローバル気象」の講演会が、この会の発足への前座的な役割を果たしたこと謝意こめつつ付言しておきたい。

3. おわりに

今後、「熱帯・亜熱帯を考える会」はこの「熱帯シンポジウム」を今後、年に2回、初夏と晩秋の頃に沖縄県において開催する予定です。第1回熱帯シンポジウムの講演予稿集には残部があります。なお、当会の会活動に御関心がある方はどうぞ下記幹事まで御連絡ください。

幹事 根間俊明(沖縄気象台予報課勤務 電話 098-833-4284)

石島 英(琉球大学教養部)